

海女文化が日本遺産に認定されました！

5月20日に文化庁が認定する「日本遺産」に「海女（Ama）に出逢えるまち 鳥羽・志摩～素潜り漁に生きる女性たち」が認定されました。ここでは、日本遺産の内容について紹介します。

教育委員会生涯学習課社会教育係 ☎ 1268



日本遺産認定証交付式の様子

「日本遺産」って何？

「日本遺産」は平成27年に創設された制度で、地域の歴史的魅力や特色を通じてわが国の文化や伝統を語るストーリーを「日本遺産（Japan Heritage）」として文化庁が認定するものです。

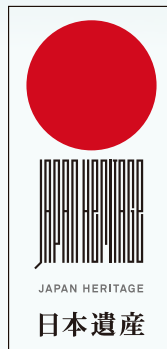
認定を受けると、文化庁より日本遺産魅力発信推進事業などの支援を受けることができます。現在、83件が認定されており、2020年までに100件程度認定するとしています。

県内では、明和町の「祈る皇女斎王のみやこ 斎宮」や伊賀市の「忍びの里 伊賀・甲賀」に続く3件目の認定となりました。

※日本遺産は文化庁が認定するものであり、ユネスコが認定する世界文化遺産とは異なります。

ロゴマークについて

認定された日本遺産を紹介するパンフレットなどにおいて表示するロゴマークは次のとおりです。今後はこのロゴマークを活用し、「海女（Ama）に出逢えるまち 鳥羽・志摩～素潜り漁に生きる女性たち」を発信していきます。



認定されたストーリーの内容

海女に出逢えるまち

鳥羽・志摩

鳥羽・志摩の沿岸部は、複雑に入り組むリアス式海岸からなり、恵まれた地形と豊かな藻場が形成された生態系を背景に、女性が素潜りでアワビなどを獲る海女漁が持続的に営まれています。海女は、近代的な潜水機器を使わず、自身の呼吸を限界までこらえ、そのわずかな間に、岩礁にいるアワビやサザエなどの獲物を獲る「50秒の勝負」に

かけています。海女漁は、日本と韓国の一部にしかみられず、鳥羽・志摩は国内でも総数の約半分にあたる750人ほどが活躍する日本一の海女に出逢えるまちです。

海女が獲ったアワビを伊勢神宮へ奉納する伝統や、海女が中心的な役割を果たす祭りや呪符などの信仰が現在でも継承されている点で、鳥羽・志摩地域の海女は、ほかの海女のいる地域とは異なる特徴があります。また、三島由紀夫の小説「潮騒」には、神島の海女・初江が主人公として描かれており、昔から鳥羽・志摩が海女のまちとして、認識されてきたことが分かります。

神々が愛したアワビ

伝説の海女「おべん」

鳥羽・志摩の海女漁の歴史は約2000年前の弥生時代にさかのぼり、白浜遺跡（浦村町）では大量のアワビの貝殻やアワビオコシが出土しています。平安時代に編さんされた「延喜式」には志摩の潜女（海女）の記事があり、潜女が獲ったアワビや海藻類が都に納められていたことが分かります。また、国崎町で海女が獲ったアワビは毎年、熨斗鯨という干物に加工

され、伊勢神宮に奉納されています。熨斗鯨の奉納の由来は、鎌倉時代の成立とされる「倭姫命世記」によると、伊勢神宮に天照大御神を祀った倭姫命が、神様の食べ物を探して国崎を訪れたところ、おべんという海女からアワビをもらい、大変おいしかったことから、この地をアワビ奉納の地と定めたとあります。

海女が獲ったアワビやイセエビなどの海産物は神饌として伊勢神宮に奉納されており、神々を魅了した特別な価値をもつものです。海女小屋体験施設などで現役の海女と触れ合いながらそれらをいただくことは最高のぜいたくといえます。



のしあび 熨斗鯨づくり (国崎町)

海女に受け継がれる信仰とまつり

海女漁は、命の危険と隣り合わせです。そのため、鳥羽・志摩には、海女をはじめとして海と共に生活する人々の信仰を集める神社や仏閣などが数多くあります。代表的



しろんご祭り(菅島町)

なものには青峯山正福寺や伊勢神宮の別宮・伊雑宮(志摩市)があります。特に青峯山正福寺は、鳥羽・志摩のみならず、伊勢湾周辺の漁業に携わる人々の厚い信仰を集める海上安全祈願の聖地です。正福寺の大門には海に関する寺らしく、龍などの彫刻に混じりエビや魚が隠れて彫刻されているほか、本堂の回廊には遭難者が奉納した嵐の中で祈る船乗りたちの姿を描いた絵馬も掛けられており、それらを探してみるのも楽しみ方のひとつです。

や黒糸の刺しゅうで星形の印(セーマン)と格子状の印(ドーマン)がみられますが、これも魔除けのためで、漁の安全を祈る信仰が今も生き続けていて一例です。貝から紫色の染料を取る貝紫染めの技術は、海の博物館で体験することができます。

これらの信仰のほかにも、鳥羽・志摩では、全国的にも珍しい豊漁や海上安全を祈る海女の祭りが各地で受け継がれています。菅島町で7月に行われるしろんご祭りは、昔ながらの白い磯着を身にまとった海女たちが一斉に潜り、つがいのアワビを獲って白髭神社に奉納し、大漁と海上安全を祈願する祭りです。祭りでは、海女漁の様子を間近で見ることが出来ます。

【五感】で感じる海女

鳥羽・志摩地域の沿岸部や離島の漁村では、海女を五感で感じる事が出来ます。港周辺を歩くと、海女らが漁の前後に体を温め、憩いの場として利用する海女小屋が立ち並び風景や、船に乗って漁場に向かう姿、獲った獲物を仕分けする姿、漁港で出荷する姿など、さまざまな海女の姿を目にします。

海女が暮らす答志島の路地

裏では、豊漁と海上安全のまじないである「まる八」印が墨で各家に書かれています。そして、細い路地裏を抜けて海岸に出ると、海女が潜る美しい海が広がります。眺望を求めて灯台に登れば、眼下には、顔を出してはまた沈む、海女たちの姿を見ることが出来ます。また、海女のおやつであるきんこいも干す姿は秋から冬にかけての風物詩です。このほか、海の博物館では約6万点にも及ぶ膨大な収蔵資料で海女の道具や、漁村の歴史・民俗資料を展示・紹介しています。

先に触れた景観(視覚)だけでなく、海藻などを干す磯の香り(嗅覚)も感じられます。志摩市の麦塔灯台では、海底から浮き上がった海女が呼吸を整えるために息を吐き出す「ヒュー、ヒュー」という磯笛がよく聞こえます。また、海女小屋や路地から聞こえる海女たちの大きな声も胸を高鳴らせてくれます(聴覚)。市場で生きたアワビやイセエビに触れ(触覚)、海女小屋体験施設では、海女から海女漁や海女文化についての話を聞きながら、海女が獲ったアワビなどの海産物や海女自家製のあられを堪能できます(味覚)。また、志摩市で実施されている海女とともに潜る海女漁体験では五感全体で海女の世界を感じることも出来ます。

鳥羽・志摩の海女漁村は他の漁村に比べて総じて明るいといわれています。それは女性がいきいきと暮らしているからです。

構成文化財について

ストーリーを構成する文化財群は地域に受け継がれている有形・無形のあらゆる文化財をまとめて、「構成文化財」と位置づけ、今後これらを観光面での活用を図っていくものです。

市内にある15の構成文化財については、広報とば8月号で紹介いたします。



海女小屋体験での海女との語り



5月20日に東京国立博物館で行われた認定式では、永岡桂子文部科学副大臣より中村市長に認定書が手渡されました

今後の動きについて

今後は、海女振興協議会内に日本遺産部会を立ち上げ、文化庁の日本遺産発信推進事業などを活用し、海女や海女漁の観光面での魅力向上や外国人観光客の誘客といった観光振興を中心とした事業を実施していく予定です。

日本遺産、認定されたストーリー、構成文化財についてくわしくは、市ホームページで公開しています。また、日本遺産の概要については、文化庁のホームページをご覧ください。



市ホームページ
(日本遺産認定について)



文化庁ホームページ
(日本遺産紹介ページ)